

## マンスフィールドの「人形の家」について

市 橋 弘 道

キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888—1923) の「人形の家」(‘The Doll’s House’) の結末部分は読者に深い感動を与える、と同時に或る謎を提供する。

1921年マンスフィールドはスイスの高地で夫マリ (John Middleton Murry) と共に平穏な数ヶ月を過ごす。その間彼女の創作活動は活発で、10月までに『園遊会その他』(The Garden Party and Other Stories, 1922) 所収の作品の大半を書き、10月14日の33歳の誕生日には「園遊会」を完成する。

10月27日彼女は日記に、次に出す本に収める予定の短編として9編の題名を書き留めている。そのうち完成されたのは「カロリにて」(‘At Karori’) だけで、10月30日に書き上げられた。この作品は翌年 ‘Nation’ 誌に発表され、その後「人形の家」と改題された。そしてこの作品は、この後彼女の死 (1923年1月) までに完成された作品と数編の断片と一緒にマリによってまとめられた『鳩の巣その他』(The Dove’s Nest and Other Stories, 1923) の巻頭の一編となっている。

マンスフィールドの創作意欲が、最も——と言ってよいであろう——激しかった時期に書かれた数編のうちの一篇が「人形の家」である。10月27日の日記に次のように書かれている。<sup>(1)</sup>

N. Z. At Karori: The little lamp. I seen it. And they were silent.

(ニュー・ジーランド。 「カロリにて」: 小さなランプ。 わたしそれを見たわ。そして彼女たちは黙ってしまった。)

この記述が「人形の家」のエンディングにほぼそのまま用いられている。

"I seen the little lamp," she said softly. Then both were silent once more.

このように、「人形の家」においては、小さなランプが重要な役割を荷負うこと、そして、そのランプを「見たわ」と言う人物が必要であること、これらのことが要点であることがうかがえる。

「人形の家」の最後の二行は上に引用したとおりであるが、この物語の結末部分はこの二行を含む最後の13行分である。この部分は、そこにおいては主人公のキザイア (Kezia) が全く姿を見せていないという点で、冒頭からそれまでの部分とは明瞭に異なっている。「人形の家」は、この結末部分を省いて、すべてキザイアの目を通して描かれていて、キザイアが姿を見せていない部分においても、キザイアの思いを通して描写されているし、また、一見作者の説明部分と思われる箇所もキザイアの心の動きの描写である。ところが、この結末部分だけはキザイアの目を通して描かれてはいない。この部分においては、キザイアは別の場所に——恐らく彼女の家の内に——いて、彼女が見たり聞いたりしたことを語るができず、また彼女の思いや心の動きを描くこともできないのである。この部分に登場するのは、ここまでの主役であるキザイアではなく、準主役ともいうべきケルビー姉妹 (the Kelveys), つまりリル (Lil) とエルサ (Else) だけである。そして、彼女らが、キザイアに誘われて人形の家を見ているところをキザイアの叔母ベリル (Aunt Beryl) に追い出され、ほうほうの体で逃げ出してきたあとのことが、ケルビー姉妹、特に妹エルサの視点から語られているのである。

このような視点の移動は、小説において決してありえないことではなく、かえってよく採用される技法の一つですらある。「人形の家」においても、この視点の移動によって作品の持味が損なわれてはいず、逆に大きな効果を与えている。したがって、「人形の家」について論ずる際に、この点はことさらに問題になりはしないし、また、なってきたりもない。しかしながら、作者マンスフィールドの伝記的事実を加味して作品の結果部分を考察してみると、そこには或る問題が浮んでくるのである。その問題とは、キザイアは何故姿を消してしまわなければならないのかということ、そして、逃げ出したケルビー姉妹が

やって来たところが何故バーネル家の家がすっかり見えないところなのか、ということである。小論はこの問題解明の試論である。

マンスフィールドの伝記的事実のうち、死別した妹と弟が彼女に与えた影響を簡単に考察しておこう。

マンスフィールドには、姉二人、妹二人、そして弟が一人いた。そのうちすぐ下の妹グウェン(Gwen)は、1890年10月11日に生まれ翌年1月9日に夭逝した。そして、マンスフィールドの父が待望していた男の子、レズリー(Leslie)が1894年に生まれた。マンスフィールドがことのほか慈しんでいたこの弟が、しかし、1915年第一次世界大戦のさなかフランスで手に持っていた爆弾の破裂という事故で10月7日に死亡した。「人形の家」を書いていた時、姉・妹・弟のうちグウェンとレズリーはすでにこの世を去ってしまっていたのである。

弟レズリーの死後マンスフィールドは自殺を考えるほど悲しみにくれる。しかしその悲しみから立ち直ることができたのは、弟と共に過した幼い頃の思い出を書き留めることを自己の義務・使命と考えたからであった。彼女は1915年11月日記にこう書いている。

……ではどうして私が自殺しないのか。それは、私たち二人ともが活々と生活していたあのなつかしい時<sup>(9)</sup>に対して私には果たすべき義務があると思うからです。

弟の死後、マンスフィールドの人生はこの義務を遂行するためについやされたと言っても過言ではない。

そして書かれたのが、いわゆる「ニュー・ジージーランドもの」と呼ばれる作品群である。そしてこれらの作品は、マンスフィールドが5歳から10歳までの時期を過したカリフォルニアでの生活を舞台とする「バーネル家」ものと、10歳から15歳頃まで過したティナコリ街75番地を舞台とする「シェリダン家」ものとに分けられる。後者に属する作品のうち代表的なものが「園遊会」である。他方前者には、弟の死後すぐに着手されて2年後に完成し出版された『前奏曲』(Prelude)と、1921年に完成された「浜辺にて」('At the Bay')と「人形の家」

とが含まれる。「人形の家」が最初「カロリにて」という題名であったことは前述のとおりであるが、この地カロリに転居した翌年1894年2月21日にレズリーが生まれているのである。「カロリにて」は、マンスフィールドが自己の義務を果たした一つの証であると言えよう。

マンスフィールドは、ニュー・ジーランドの首都ウェリントンのティナコリ街11番地で生まれた。そして妹グウェンもまた同地で誕生している。マンスフィールドが2歳になる3日前であった。グウェンのことをマンスフィールドは、1916年日記に“子供時代の思い出”として5頁にわたって書きしるしている。<sup>(4)</sup>以下に二人の初対面の時の様子を簡単に示してみよう。

母の部屋へ入った。母はベッドに横になっていて、私には何の注意も払わなかった。恐らく眠っていたのだろう。ベッドの傍に私のおばあちゃんが膝の上にフランネルにくるまれた赤ん坊を乗せて坐っていた。「あんたの妹よ」と言って祖母はフランネルをかき分けた。金髪の丸い頭と大きな顔が見えた。目は閉じていた。雪のように白い。「生きているの」と問うと、「勿論よ、私の指をしっかりと把っているのをごらん」と祖母。「この子好きかい」と尋ねられたので、「えゝ。この子人形の家で一緒に遊んでくれる」と私。「そのうちにね」と聞いて、私はとてもうれしかった。ヘイウッド夫人がくださった人形の家があったから。ベランダもバルコニーもついていて、戸も開閉できるし、二本の煙突もついているきれいな人形の家。私はそれを誰か他の人に見せたくてしかたがなかったのだ。「名前はグウェンよ。キスしておあげ。」そこで私はキスしたのだけれど、あの子ぜんぜん気がつかなくて、あいかわらず目を閉じたままじっとしていた。「お母さんにもね。」しかし母は私にキスして欲しそうではなかった。けだるそうに枕にもたれて、母は何かを食べていた。

日記の記述はさらに続く。要点だけを取り出してみる。人形の家が届けられた時家には子供はマンスフィールド一人だったので、彼女一人でその家をすっかり、台所から食堂、二階の寝室とテーブルの上の人形のランプを、何度も何度も見、そしてそれを誰かに見せてあげたくてしかたがなかったこと。いままですら自分にかかりきりであった祖母が、今や一日中グウェンに占領されてしまったこと。そして或る日、祖母の膝に抱かれたグウェンの写真が撮られ、その

写真が子供部屋の暖炉の上に掛けられてあること。そして最後に、「その写真はとてもよく撮れていると思った。人形の家も写っていた——ヴェランダもバルコニーもその他のものも全て。ばあちゃんが私を抱き上げて小さな妹にキスさせてくれた。」と締括っている。

ここに言及されている写真を私たちも見る<sup>(6)</sup>ことができる。黒っぽい服に白っぽいエプロンらしきものを身につけ、帽子をかぶって椅子に坐っている祖母が、膝の上に白い——と思われる——衣服に包まれた頭の大きなグウンを抱いている姿が写っている。そしてその背後に人形の家がほぼ全部の姿を見せている。人形の家を想い描く時マンスフィールドは、母の素っ気無いない対応——冷やかな拒絶——を思い出したことであろう。そしてまた、自分が生まれて以来母に代わって慈愛深く育ててくれた祖母、その手がすっかりグウェンに奪われてしまったこと——安心して頼れるものの喪失——をも思い出したにちがいない。それに加えて、他の人に見せてあげたいという強い欲望を抱いたことも。人形の家は、マンスフィールドにとっては以上のような彼女の幼ないころの体験と密接に結びついているのである。そしてまた、人形の家という時、白い長い全身を包む衣服を着たグウェンが常に思い出されたにちがいない。

マンスフィールドが「弟と過したあのなつかしい時」と言う時、弟が生まれたカリフォルニア時代以降のことに限定して言っているのではなく、それ以前をも含めて言っているるのであろう。彼女がニュー・ジージーランドで過した時期、1903年15歳でロンドンに行くまでと、一たん帰国（1906年）して再びロンドンにもどる（1908年）までの——その後二度と祖国に帰ることはなかった——の全ての期間、ニュー・ジージーランドでの自己の幼年・少女・青春時代のことを書くこと、これが自己に果した彼女の使命であったのである。「人形の家」はこの使命感から生まれた作品である。

さてこれから作品を読むことにしよう。

「人形の家」の物語は、都心から少し離れた郊外に住むバーネル家を中心に、展開する。この家族が住んでいる家は、中庭や飼料小屋もある大きな屋敷である。ここに三人の娘、年齢順に上からイザベル(Isabel)、ロティ(Lottie)、

キザイア (Kezia) がいて、三人とも同じ小学校に通っている。物語の主人公は末娘のキザイアである。このキザイアの目を通して、物語のほとんどすべてが描かれている。

このバーネル家の子供たちに、泊めてもらったお礼にと老ヘイ夫人 (old Mrs. Hay) から人形の家が送られてきたところから、物語は始まる。この人形の家をキザイアはどのように受け取ったか、彼女の人形の家に対する印象が、物語の最初に語られている。

キザイアはまずその大きさに注目する。中庭に運び入れるのに荷馬車屋とバーネル家の下働きのパット (Pat) の大人二人がとりかからなければならないほど、それは大きかったのである。次に、塗りたてのペンキの匂いがキザイアを襲う。キザイアは、「気分が悪くなるほどだ」と冷やかに言うペリル叔母の声を聞き逃さない。次にキザイアの目を引いたのは、人形の家色彩である。全体が法蓮草のような緑色で、鮮やかな黄色の縁取りがしてある。煙突は赤と白、戸は黄色、窓枠は緑色、ポーチは黄色なのである。華やかで明るい感じを与える人形の家ではあるが、キザイアはそこにペンキ独特の「てかてか (oily)」した、「黄色のニスで光った (gleaming with yellow varnish)」要素を見つけている。その上キザイアは、ポーチの端からぶさ下っている凝固したペンキの大きな塊りを、見逃さなかった。

以上が人形の家の外観から受けたキザイアの第一印象であった。派手な原色の服を着て、けばけばしく化粧し、口先のうまい (oily)、うわべを飾った (varnish)、その上いぼでもつけている人物、あるいはそういう人物の住む家を、思わせはしないか。

「それにしても申し分のない、完璧な小さな家」、早く内部を見たい、とキザイアは思う。この人形の家は、外側から見ると一軒の家となっていて、内部が見えない。そこで、パットが留金をはずす。すると家の前半分が180度回転して、内部が一度に現われ、居間、食堂、二つの寝室が見えた。そして、内部の家具類も見えた。家具といい室内装飾といい、裕福なバーネル家の子供たちですら「今までに見たことがない」ほどのものであった。全ての部屋には壁紙が貼ってあり、金色の額入りの絵が掛っている。床にはじゅうたん、椅子は上

質の布張り、ベッドには本物のベッドカバー、それに、揺りかご、ストーヴ、食器戸棚、テーブル、どれもこれも実に豪華なものばかりである。子供たちは「オー」と嘆声をもらす。「しかしキザイアが他のどれよりも好きになったのは、恐ろしいほど好きになったのは、ランプであった。」食堂のテーブルの真中に置かれてあるランプ。白い火屋のついたかわいい琥珀色のランプ。いつでも火がつけられるように、オイルのようなものが詰められていて、揺らすとそれが動くランプ。

キザイアはこのランプを発見することによって、人形の家に親近感を抱くのである。人形の家に自分なりの価値を見出したのである。キザイアの抱く価値感がこのランプを発見させた、と言えよう。ランプを見つけてキザイアは、人形のいる家を見直して、次のように感じている。

父さん人形と母さん人形は、まるで気を失ったみたいにかたくなって、居間でぶざまに大の字になって横たわっている。二人のかわいい子供人形は二階で眠っている。これらの人形はこの人形の家には実際大きすぎて、この家のものではないかのようである。それに反して、ランプは申し分ない。キザイアに微笑みかけて、「私ここに住んでいるの」と言っているように見える。ランプはほんものであった。

キザイアの思いの中で、ランプと人形とが明瞭に対比されている。大人の人形たちは、「失心し(faint)」、「硬直し(stiff)」、「ぶざまに大の字になって横になって(sprawl)」いる。子供の人形は、「眠って(asleep)」いる。人形たちは、真実なものに対し、真に価値あるものに対して目覚めていず、まるで死んでいるかのようである。それらは生きていない。それに対してランプは、「申し分なく(prefect)」て、「微笑み(smile)」さえしている。「人形たちはこの家のものでないかのようである(They didn't look as though they belonged.)」のに対して、ランプは「ここに住んでいる(I live here.)」。「ランプはほんものである(The lamp was real.)」のに対して、人形たちはそうではない。

ところで、これらの人形たちは、パーネル家の家族構成を念頭に置く時、キザイアの両親と二人の姉たちのことを表わしていることに気付く。そして、人

形の家の外観に対するキザイアの前述のような印象を重ね合わせてみると、この人形の家そのものが実はバーネル家の象徴であることに思い至る。しかし、もしそうだとすれば、キザイアは家族の中にいないことになる。まさしくそのとおりである。ではキザイアは一体どこにいるのであろうか。

物語の展開につれて、キザイアが家族からも、また、学校友たちからも無視されている姿がはっきりとしてくる。

バーネル家の子供たちは、人形の家のことを学校友たちに語りたくて、自慢したくてたまらない。そこで、人形の家が乾燥のために中庭に置かれている間、一度に二人、お茶の時間までに切り上げること、家の中をうろうろしないこと、という条件つきで、学校友たちに見せてもよいという取り決めがなされた。人形の家を友だちに見せたいという子供たちの願望が、親の管理下のもとで認められたことになる。ここに先ず大人対子供の構図が現われる。さて、三人のうち誰が友だちを選び説明するかが問題となる。長女のイザベラが、長子であることを理由に、その権利を主張する。ここに子供たちの中の長・幼の構造が浮んでくる。しかもイザベルは、「お母さんもそうしていいとおっしゃった」と、親を後ろ盾にして、この件に決着をつける。かくして、子供たちの長・幼が、大人対子供と重なり、長は大人と結びつくことになる。末っ子のキザイアは、見せて自慢したいという切望を大人からも姉からも封じ込められてしまう。

さて、校庭の一角、松の木の下でイザベルを中心に人の輪ができる。彼女はまるで「謁見式」を行っているかのよう。イザベルは誇らしげに人形の家の話しをしている。話し終ったところでキザイアが、ランプを説明し忘れている、と口をはさむ。そこでイザベラはランプのことを話し、「本物と区別がつかなくてよ (You couldn't tell it from a real one.)」と、実物のランプに似ている点を強調する。しかしキザイアは、イザベルの「本物のランプ」という言い方に、自分が思っている半分もランプのことを大事に思っていない、と反発して、「ランプが最高よ (The lamp's best of all.)」と言い返すのである。

「しかし誰も注意を払わなかった (But nobody paid any attention.)」。ここでキザイアは、姉や学校友たちの輪の外にいないことを、はっきりと知ったの



である。

しかし輪の外 (outside of the ring) にいるのはキザイアだけではなかった。子供たちが集まる時、いつもその輪の外に二人の人物がいた。それはリルとエルサというケルビー姉妹である。

なぜこの姉妹はいつも輪の外にいるのか。バーネル家の近隣には学校が選択しようにも一つしかなく、したがってそこへはあらゆる階層の子供たち、判事や医者の子供も、また、商店主や乳搾りの子供たちも通っている。しかし「どこかで線が引かれなければならなかった (The line had to be drawn somewhere.)」。ケルビー姉妹の母は洗濯女である。このことだけでもずいぶんおぞましいとされる。その上父親が牢獄にいるという噂である。そこでケルビー姉妹のところで一線が引かれたのである。そして、バーネル家の子供たちも他の多くの子供たち同様、彼女らに話すことすら許されていないのである。学校の先生ですら、この線引きに加担している。ケルビー姉妹は、大人たちの抱いている偏見、職業差別のスケープ・ゴートにされているのである。

姉イザベルに選ばれた子供たちが、二人ずつ毎日人形の家を見に来る。中庭に立って、そこに置かれている大きな人形の家を見、同時に子供たちはバーネル家の大きな屋敷を見ることになる。そして何日かが経ったある日、松の木の下でのお弁当の時間も人形の話でもちきりであった。キザイアは、自分たちが厚いマトンのサンドウィッチやバターをたっぷりぬった厚いパンを食べている、そのすぐそばで、いつものように輪の外で、耳だけはキザイアたちの方に向けながら、ケルビー姉妹が赤いしみのついた新聞紙から取り出してジャムサンドウィッチを食べているのを、目にする。その時彼女は思い出した。一度だけでいいからケルビー姉妹にも人形の家を見せてあげたい、と母に懇願したが、拒否され、それでもなおくいさがって強く頼んだ時、「あっちへおいぎ (Run away), キザイア。どうしてだめなのかはよく分っているでしょう。」と、にべもなく断られてしまったのを。キザイアは、姉や学校友たちの輪の中にも入れず、母——大人——からも拒否されてしまったのである。しかし、その分だけ彼女はケルビー姉妹に近い、と言えよう。

その近さを決定的なものにする出来事が起る。ついに人形の家を見ていない

のはゲルビー姉妹だけになった。そんな日は話しもたるみがち。お弁当の時間、例によって松の木の下に集まった子供たちは、ケルビー姉妹の姿を見て、からかいおどかしてやりたくなる。最初は、「リルは大人になったらお手伝いさんになるんだって。」「まあ、いやね。」と、ささやきあっては、こんな時母親がするようにうなずきあっていた。しかし、それではものたりなくなって、ついにリーナ・ローガン (Lena Logan) がそのことを当のリルに金切り声で言うてしまうが、リルがいつものように「馬鹿のような、恥かしそうな微笑み (her silly, shamefaced smile)」を浮かべるだけで取り合わないでいるので、リーナは「ヤーイ、あんたの父ちゃん牢の中。」と言い放つ。そして子供たちは歓声をあげて、走り去り、誰かが見つけた縄で縄飛びを始め、いままでになくうち興じたのである。ケルビー姉妹が子供たちの気晴らしの対象にされたのである。

その日の午後、家に帰ったキザイアは一人で中庭の大きな白い観音開きの戸を揺らして遊んでいた。すると遠くからケルビー姉妹がやってくるのが見えた。一瞬キザイアはためらうが、すぐ決心する。彼女はついに姉妹に話しかける。人形の家を見に来るように誘う。リルの返事は、「あんたの母ちゃんがうちの母ちゃんに、あんたがわたしに声をかけないように言ったの。」である。また大人である。キザイアは、「そんなこと問題じゃないわよ。」と答える。しかしリルは応じない。だがエルサが、いつも姉の衣服の一部をつかんで後からついて歩き、用がある時にそれを引っぱって合図するエルサが、この時姉の服を引っぱった。そして二人はキザイアの後について行き、ついに人形の家を見た。「居間でしょう、食堂でしょう。そしてあれが……。」

その時突然ベリル叔母が現われ、「出ておいき (Run away)」と、怒鳴り散らす。叔母はこの時、恋人との間に行き違いがあってもやもやした気分であったのだが、子供たちを追い出して、心が軽くなり「鼻歌を歌いながら (humming)」家へと入っていった。ケルビー姉妹は大人の憂さ晴らしにもなっているのである。

キザイアは、叔母に「あの子らに話しかけてはいけないのよ (You're not allowed to talk to them.)」と叱かれて、どうしたか。キザイアのその後には

については、何ら書かれていない。キザイアはこの時点で姿を消してしまうのである。他方ケルビー姉妹はどうしたか。二人は、大きな——単に面積が広いという意味だけではない——中庭を横切り、白い門をすり抜けて、門の外へと走り去ったのである。そして、その後のことは次の結末部分に描かれている。少し長くなるが引用してみよう。

ケルビー姉妹がバーネル家の家がすっかり見えないところまでやって来た時 (When the Kelveys were well out of the Burnells'), 二人は道端にある大きな排水管の上に坐って一休みした。リルの頬はまだ火照っていた、彼女は鳥の羽根のついた帽子を脱ぎ、それを膝の上に置いた。二人は、夢をみているかのようにぼんやりと (dreamily), 視線を牧草地、そのむこうの小川、それからアカシアの木立へと走らせた、木立のところではローガン家の牛たちが乳を搾られるのを待って佇んでいた。何を考えているのかしら。

やがて、わたしたちのエルサ (our Else) が姉の方へそっと近づいた。だがその時にはあの腹を立てて怒っていた女性のことはすっかり忘れてしまっていた。エルサは指を一本つき出して、姉の羽根飾りを撫でた、彼女はめったに見せない微笑みを浮べた。

「私見たわ、あの小さなランプ」、と彼女はそっと言った。

それから二人はまた黙ってしまった。

キザイアは人形の家の中の小さなランプを殊の外好きになった。豪華な家具調度類をではなく、小さなランプを。物質的な豊かさより、真実の光を放つランプを。そして、彼女は「ランプが最高よ」と宣言した。だが、誰も注意を払わず、彼女は全く無視されてしまった。しかしながら、彼女がそう宣言した時、子供たちの輪の外にいて聞き耳を立てていたエルサ、人々から何かと話題にされている「例のエルサ (our Else)」だけは、その言葉を聞き取っていたのである。大人からも、姉たちからも、友だちからも無視されたキザイア、輪の内にいながら輪の外にいるキザイア、その彼女が発見したものが、人々の偏見によって除け者にされて輪の外にいるエルサによってしっかりと受け取られ

た。ランプ、ランプを発見したキザイア、ランプが「ここに住んでいるの」と微笑みかけていると感じるキザイア、ランプはほんものだと思えるキザイア、このようなキザイアがエルサに確かに伝わった。ランプの微笑みが、めったに笑わないエルサを微笑ませた、と言えよう。「人形の家」の読者は、エルサの微笑と言葉に、「ホッ」と一息つき、心安らぐものをおぼえ、深い感動を味わうにちがいない。

さてここで、拙論が解明しようとしている問題にもどろう。

キザイアは中庭の戸を揺らして遊んでいた。そして彼女は、戸の外にケルビー姉妹の姿を見つけて、戸を開いて彼女たちを戸の中へと誘う。キザイアは、引かれていいる一線の線の上、境界線上にいて、一旦はその線を断ち切った。禁を破って、外を内に入れた。だが、その線はすぐさまベリル叔母、大人、偏見によって閉ざされてしまい、内と外とはもとどおり内と外とに分けられてしまう。ケルビー姉妹は外へ、キザイアは内へ。キザイアはその時点でやはり姿を消さなければならなかった。たとえ彼女が、輪の内の輪の外にいても、やつり輪の内にいることには変わりがないのであるからには。キザイアはまごうかたなくバーネル家の娘である。

しかし、彼女が輪の内にながら輪の外にいる、このこともまた事実である。そして彼女はこの輪の内の輪の外という在り方を打ち破ろうとする。輪の中の内・外という区別をなくそうとする。姉たちや友だちに「ランプは最高よ」と主張した。母には「一度でいいからケルビー姉妹に見せてあげたい」と訴えた。言葉でだめならと、彼女はケルビー姉妹を中庭に招じ入れた。これらの努力は、しかし、ことごとく失敗してしまった。姉たちには無視された。母や叔母からは「あっちへおいき (run away)」「出ておいき (run away)」と押しもどされてしまった。ここまでくればキザイアにとって、「内の外」を解決する方法は「内」は「内」、「外」は「外」にしてしまうことである。「内」から、「外」へ出てしまうこと、家を出る (run away) ことである。

しかし、キザイアは家を出なかった。だが、マンスフィールドは家を出た。20歳の時、両親の反対を押し切って、家出同然に家を出た。ティナコリ街11番

地、カリ、ティナコリ街75番地、ウェリントン、ニュー・ジーランドを去って、バーネル家の家がすっかり見えないロンドンに出た。1908年のことである。それから13年後、今スイスの高原シェール (Sierre) のサパン荘 (Châlet des Sapins) にいる。眼前には、牧草地、小川、森、そして搾乳を待つ牛たちがいる。今やマンズフィールドの心は、弟の死によって喚起された、あのなつかしい時代へともどっている。

人形の家が、思い出される。連想は連想を生み、妹グウェンのことが、白いフランネルに全身を包まれたグウェンのことが、記憶に鮮やかに甦ってくる。そしてあの、「ナイトガウンのような白い長い服を着た」エルサが登場する。

「例のエルサ」our Else は、「わたしたちのエルサ」でもあるのだ。この言葉は、グウェンが単なるエルサのモデルではなく、それ以上のものであることを示している。そして、グウェンから、あの時母にも祖母にも拒否されたと感じた自分へと、思い出は移る。そして人形の家にあったランプへと。こういったなつかしいくさぐさの思い出に、青春時代に抱いた文学への強い憧憬、自分が祖国を去る原因となった芸術への熱い情熱をからめて、ここにマンズフィールドは「人形の家」を生み出したのである。だからこそ、キザイアの見つけたランプが、外に出たエルサによってしっかりと受けとめられなければならないのである。キザイアはマンズフィールドであり、エルサは外に出たキザイアであり、ランプは文学である。ランプの光は、これら三者を照らしている。

#### 注

- (1) *Journal of Katherine Mansfield*, ed. by J. Middleton Murry. (N. Y. Howard Fertig, 1974). p. 198. (以下 *Journal* と略記する)
- (2) テキストには次のものを用いた。  
*Katherine Mansfield: Selected Stories* (Oxford University Press, 1987) 「人形の家」は pp. 337—344 である。なお、短かい作品であるので、テキストからの引用には頁数を付けなかった。
- (3) *Journal*, p. 38.
- (4) *Journal*, pp. 50—54.
- (5) Antony Alpers: *The Life of Katherine Mansfield* (London, Jonathan Cape, 1980). この本の中ほどに数多くの写真が集められている。